

中古和文系資料における副詞「モシ」

永田里美

キーワード：副詞、モシ、仮定条件文、疑問文、主観的表現

要旨

本稿は中古の和文系文学作品を資料として、副詞モシの用法上の整理を行ったものである。

中古和文系資料におけるモシは、仮定条件文や疑問文と共に用いられることが多い。それらの形式と用法をみると、仮定条件文についてはバ、トモという主観的な仮定表現がみられ、また疑問文については問い合わせの性格が希薄な、不確かさを述べ立てる表現であることがわかる。その他の用法についても、モシは推量や推定表現と共に用いられていることから、モシには共通して話し手の主観的な想定事態を提示するという機能が認められるといえる。

0. はじめに

近年、現代語においていわゆるモダリティの研究が活発に行われるなか、古典語の領域においても、こうした研究成果を受けつつ体系的な記述をはかろうとする研究が進められている。しかしながらこれまで考察の対象とされてきたのは、主に中古和文系資料における助詞、助動詞群、具体的にはゾ、ナムなど伝達に関わる助詞^{*1}や、いわゆる推量系の助動詞群^{*2}であり、それ以外の形式についてはいまだ考察の

*1 森野崇氏による一連の研究がある。(森野崇(1987)「係助詞「なむ」の伝達性-「源氏物語」の用例から」「国文学研究」92、同(1992)「終助詞「かし」の機能」「辻村敬樹教授古稀記念日本語史の諸問題」明治書院、同(1992)「平安時代における終助詞「ぞ」の機能」「国語学」168など)

*2 近藤(1991)、高山(1992)など。

余地が残されているようである。なかでも、古典語における疑問文の位置づけ^{*3}についてはさほど言及されていないというのが現状であると思われる。

そこで本稿はこうした背景を踏まえた予備的作業として、疑問の助詞と共にしばしば用いられるモシという副詞をとりあげ、その用法上の整理を行おうとするものである。こうした文副詞の性格を明らかにすることによって、共起^{*4}関係にある表現形式の意味成分をより明確にすることが可能になるものと考えるからである。

具体的な考察手順としては、モシがどのような表現形式と共に起関係にあるのかということを調査し、モシの用法上の整理を行うとともに、モシの意味的側面を明らかにすることを試みる。そして最後に、本稿で得られた結果が、疑問文の考察上、どの程度有効なものなのかという点についてふれたい。

1. 先行研究

中古の和文系資料における副詞モシの先行研究は、管見の限り存在しないようであるが、上代の資料に現れるモシについては、是澤(1999)、是澤(2000)による論考が存在する。ただし本稿とは調査範囲も考察の目的も異なっているため、ここでは本稿に関連する箇所を簡略に提示するにとどめる。

是澤(1999)(2000)は上代における「若(モシ)」が和語と漢語とで意味領域を達していることに着目し、その用法の分布をみるとことによって記紀の資料的位置づけを行った論考である。是澤論文は上代のモシにみられる用法として「仮設」「疑問推量」「並列」という三用法を挙げ、これらのうち殊に「疑問推量」が和語的意味領域、「並列」が漢語的意味領域であることを指摘した上で、それらの分布の様相を論じている。後述するように中古の和文系資料におけるモシには「並列」用法はみられない。モシにこうした位相差が存することは興味深いが、是澤論文では、「仮設」と「疑問推量」における構文的特徴^{*5}や両用法の具体的な意味的特徴は明らか

*3 現代語については森山(2000)が興味深い指摘を行っている。なお古典語の疑問文については正面から論ぜられてはいないが近藤(1991)が存する。

*4 本稿における「共起」は「各形式が意味的に衝突することなく共に用いられる」という意味合いで使用している。

*5 例えば本稿の立場からは「疑問推量」とは推量系助動詞を伴った疑問文を指すのか、あるいは、疑問の助詞のみでそのような意味を担えるのかという点が問題となる。

にされておらず、各用法の間にみられる連関性を知る上で、さらなる考察の余地を残していると思われる⁶。

そこで本稿ではモシの用法を整理するにあたり、最初に、モシがどのような表現形式と共に起關係にあるのかということを概観し、そこに分類された個々の形式における意味的特徴を掘ることで、モシの性格をさらに明らかにしてゆきたいと考える。

2. モシと共に用いられる表現形式

最初に、モシがどのような表現形式と共に起關係を結びやすいのか、という傾向をみてゆくこととする。以下に掲げるのは、中古における和文系資料『竹取物語』『宇津保物語』『落窓物語』『源氏物語』『堤中納言物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『枕草子』8作品に現れるモシと共に起關係にある表現形式を分類したものである（テキストは岩波書店日本古典文学大系による）。

表1. モシと共に用いられる表現形式（表中ブランクは用例0を示す）

	竹取	宇津	落窓	源氏	堤中	土佐	蜻蛉	枕草	総数
a. モシ-バ-	4	8		32	1	1	4		50
b. モシ-ヤ-		15	3	20		1	5	3	47
c. モシ-カ		10		2				2	14
d. モシ-トモ-		1		2			1		4
e. モシ-ハ-		1		2			1		4
f. モシ-ニ-				1					1
g. モシ-時				1					1
h. モシ-モゾ-		1							1
i. モシ-モコソ-				1					1
j. モシ-ラム		1							1
用例数合計	4	37	3	61	1	2	11	5	124

*6 是澤論文では仮設と疑問との関係について、斯波六郎(1947)「為富考」「漢文学紀要一」の説「疑惑するといふことは、仮定しながら疑惑することに外ならず、…即ち仮定するといふことと、疑惑するといふことは、その本質において相通するのである。」を引用している。しかしこの捉え方はいさか概念的であり、仮定には客観的事実を扱う場合が存在することから仮定すること 자체は必ずしも疑惑を伴うわけではないと考えられる。

また、表1とは別に、モシが単独で用いられているものも存するため、表2として以下に示す。

表2. モシ単独用法（表中ブランクは用例0を示す）

	竹取	宇津	落窓	源氏	堤中	土佐	蜻蛉	枕草	總数
k. モシ単独用法		2		1			1		4
l. モシヤ単独用法		1					1		2
m. モシモヤ単独用法		1		1					2
用例数合計	0	4	0	2	0	0	2	0	8

これらの表は用例数の多寡によってまとめたものであるが、以下、用法の検討を加える上で煩瑣を避けるために、表中 a ~ m に属する用例をその構文的特徴から分類しておく⁷。

まず第一に着目されるのは、疑問文⁸や仮定条件文が用例の大半を占めており、それぞれの用例数が近似しているということである。

- ・ b や c のように助詞ヤ、カによる疑問文と用いられる 61 例。
- ・ a バ、d. トモ、e. ハ、f. ニ、g 時による従属節を含む文と用いられる 60 例。

また、いずれも疑問文や仮定条件文に比して用例数が少ないが、モシは推量系の助動詞や、モコソ、モゾという、しばしば懸念を表すとされる複合助詞と共に用いられる他、単独的に用いられる例も存する。

- ・ h. モゾ、i. モコソや j. テムという推定あるいは推量表現と共に用いられる 3 例。
- ・ k. モシ、l. モシヤ、m. モシモヤという単独用法 8 例。

ここに分類されたモシにはそれぞれ、意味的にどのような共通点が見出されるの

*7 なお本稿の調査資料においては、モシは会話文あるいは心中思惟にのみ現れ、和歌や地の文における用例は見出されなかったことを付記しておく。

*8 本稿では形態的にヤ、カという助詞を伴う文を「疑問文」と称し、意味的に、聞き手に対して命題の真偽を問う（回答を求める）文を「問い合わせ（の文）/質問表現」と呼ぶ。

であろうか。以下に、それぞれの用法と個々の形式に検討を加えてゆくこととする。

3. モシの用法

3.1. 従属節と共に用いられた場合

最初に、従属節と共に用いられたモシについてみてゆくこととする。先に掲げた表1から看取されるように、このタイプの用例のほとんどが未然形に接続するバによる仮定条件文であり、バに統いて、トモ、ハの用例が若干みられる。これらの形式について着目されるのは、松下(1928)の述べる「有形の未然法」に属することである。「有形の未然法」とはすなわち、これらバ(ハ)、トモによって導かれる主節には原則として「ム、ジ、マシ、欲望(p.799)」が現れるというものである。これらは話し手の主観的な⁹「仮定表現形式¹⁰」といえ、後述するように、現代語におけるモシが客観的な仮定条件文と共に用いられることを考慮すると中古の和文資料におけるこのような分布の偏りは興味深い現象であると考えられる。以下にそれらの代表的な用例を示す(用例中、※は本稿の筆者が補った。以下、同様である)。

a. [モシ-バ]

- (1) 「(※女三宮が) もし、さやうにおはしますやうもあらば、(※紫上は) いみじき人と聞こゆとも、(※女三宮と) たち並びて、おしたち給ふ事は、えあらじ」とこそは、推し量らるれど、(『源氏物語』若葉上 vol.3.p.222)

d. [モシ-トモ]

- (2) 「誰となくて、二条の院にむかへてん。もし、聞こえありて、便なかるべき事なりとも、さるべきにこそは。我が心ながら、いとかく、人にしむことはなきを、いかなる契りにかはありけん」など、おもほしよる。(『源氏物語』夕顔 vol.1.p.137)

⁹ 主観的表現形式と客観的表現形式の分類については北原(1981)に従う。

¹⁰ バやトモの有する主観的要素については高山(1993)によって構文的な観点から検証されている。現代語においても「～ナラ」にその性格が窺われる(蓮沼(1985)など)。すでに先学で明らかにされているように、「～ナラ」条件文の主節には話し手の判断に觸れる形式が必要である(益岡(1993)など)。

e. [モシ-ハ-]

(3) 「もしさらずは、先帝のみこたちがならん。」とうたがう。(『蜻蛉日記』p.149)

残る [モシ-ニ-] [モシ-時] の 2 例はいずれも主節の事態が生起する時を限定する従属節である。これらは必ずしも話し手の主観的な表現形式であるとは言い難いが、この 2 例は [モシ-ニ-] についてはモシがみられない異文が存在し、また [モシ-時] については、主節が省略されている。

f. [モシ-ニ-]

(4) 「わが (衆匂宮)、かく、すぞろに、心弱きにつけても、もし、(衆その裏が浮舟を思慕する故であると薫が) 心えたらむに、さ言ふばかり、物のあはれも、知らぬ人にもあらず。」(『源氏物語』蜻蛉 vol.5.p.291) → モシなしの異文あり

g. [モシ-時]

(5) 出づるとても、かたみに、宿るところ問ひかはして、「もし又、追ひ惑はしたらむ時」と、危くおはえけり。(『源氏物語』玉鬘 vol.2.p.355)

この用例 4、用例 5 の 2 例を除外すると、モシは従属節と共に用いられた場合、話し手の主観的な表現形式と共に用いられているということがわかる。言い換えるば、モシが共に用いられる仮定条件文の主節と従属節は、その主節の文末表現形式からもわかるように、話し手の主観性によって関係づけられている^{*11}のであり、モシはこうした主観的な想定事態を提示するという機能^{*12}を有しているといえる。先にもふれたように、現代語におけるモシは次のとおり、主節が無標の形式であり、

*11 話し手の主観的な仮定表現では真理を扱うことができない。例えば現代語では
(ノ) ナラが主観的な仮定表現に該当する ([*3 を三乗するなら、27 になる])。蓮沼
(1985)、益岡(1993)など参照。

*12 モシが提示する主観的な想定事態が具体的にどのようなものを指すのかということについて、他の副詞との比較の上で検討を加えたい。ここでは少なくともモシは客観的事実を提示するよりは、主観的な想定事態を提示するということを指摘するにとどめる。

客観的事実を扱った仮定条件文と共に用いられることが可能である。こうした相違において、中古和文系資料におけるモシが主観的な仮定表現と共に用いられるという傾向はまず、着目すべきと思われる。

- (6) 東京からの情報通り、掛川早苗の官職脱退がもし事実とすれば、勿論これは社会面の大きいニュースであった。しかし、何十年か終始画壇で孤立主義を採って来た掛川早苗の動静については、正確な知識は当の本人以外誰も持ち合せていないと言ってよかったです。(井上靖『あすなろ物語』)
- (7) もし発病初期に体のだるさを感じたら、何よりも先ず休養して栄養を摂ることが肝腎である。無理を押して仕事をするものは、下手な植木屋が移植した松の木のように、次第に気力を失って生命を断つて行く。(井伏鱒二『黒い雨』)

3.2. 推量、推定表現と共に用いられた場合

こうした主観的仮定という用法を有するモシは推定や推量を表す形式とも共起関係を結ぶことができる。以下の用例が示すように調査資料にはモコソ、モゾ、ラムが見出された。モコソ、モゾは話し手の期待度の低さを表すモ¹³によって、しばしば危惧、懸念を表したり、また用例8のように可能性を表し得る形式である。また、ラムについてはしばしば原因推量を表すとされるように、客観的には不確かな事態を話し手が原因として想定する形式である。いずれも話者によって命題の真偽判断が下された表現であり¹⁴、主観的な想定事態を提示するというモシの機能に調和するものである。

h. [モシ-モゾ-]

- (8) かくて、嵯峨院、もし宮男もぞ生み給ふとおぼして、朱雀院おり給ひて初めて参り給へりけるに、大后の宮聞こえ給ふ。(『宇津保物語』vol.3.p.304¹⁵)

*13 こうした「意外」を表すモについては沼田(1995)を参照。

*14 高山(1995)はモコソ、モゾの結びに推量系助動詞が現れないことに着目し、モコソ、モゾ自体が推量文に相当する機能を有することを述べている。

*15 『宇津保物語』の本文については読みやすさを考慮し、一部、表記を私にあらためた箇所がある。以下同様である。

i. [モシ-モコソ-]

(9) 「さらに、この世のこと、かへりみじとは、思ひ捨つれど、たいめんなむ、
いま一度あらまほしきを。もし、うらみのこりもこそすれ。ことごとしきさ
まならで、わたり給ふべく」きこえ給ひければ（『源氏物語』若葉下 vol.3.p.336）

j. [モシ-ラム]

(10) 「もし、人を此事侍らで夜昼候はせ給ふ事侍るらんと思ふこそいと不便なれ」
（『宇津保物語』vol.3.p.324）

3.3. 疑問文と共に用いられた場合

そこで、モシがヤ、カと共に用いられた場合についてみてゆくこととする。古典語においてヤ、カが疑問文を構成する助詞であることは広く知られるところであるが、通常、疑問文は命題の真偽値を問うというモダリティ（疑問法）であるため、命題の真偽値を主張する副詞は疑問文に生ずることはないと¹⁶とされる。これまでにみてきた、主観的な想定事態の提示というモシの機能を考慮すると、モシが疑問文と共に用いられることはやや奇妙に見える。以下、具体的な検討を加えてゆくことにする。

3.3.1. [モシ-ヤ-] の用法

まず、モシがヤによる疑問文と共に用いられた用例をみてみる。ヤは富士谷成章によれば「問い合わせ」を表すとされる¹⁷。こうした見方は広く受け入れられており、また、ヤの基本的用法であると考えられる。しかし、先にも述べたモシの機能を考慮すると、ここにみられるヤは「問い合わせ」というよりは命題の真偽値が不確かであると

*16 中右(1980)参照。

*17 「『里言』に「カ」といふに、「思ふカ」と「問ふカ」の二つあり。「思ふカ」は
〔か〕に当たり、「問ふカ」は〔や〕に当たり。…むげに知らぬ事をば、問ふといふ。
(中田・竹岡(1960)『あゆひ抄新注』p.126)」

いうことをむしろ述べ立てる「疑念^{*18}」と解釈するのが穏当であろう^{*19}。

この解釈を支えるものに、本稿の調査資料における〔モシ-ヤ-〕の47例中39例が以下に示すような心内発話にみられる用例であったということがあげられる。これらの用例にみられるやは「問い合わせる」というよりは、「-かと思う」に相当する「疑念」として解釈する方が自然である。

b. [モシ-ヤ-]

- (11) 「身に、もし、疵などやあらん」とて、見れど、「こゝは」と見ゆるところなく、うつくしければ、(『源氏物語』手習 vol.5.p.349)
- (12) 「上の人々も、うち休みて、かやうに思ひかけぬ程に、もし、さりぬべき隙もやある」と藤臺わたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、(『源氏物語』花宴 vol.1.p.305)

むろん、ヤが会話で用いられる場合もある。この場合、「疑念」は語用論的に問い合わせ性を帯びるが、こうした用例は先述のとおり少数にとどまる。

- (13) 「などか、昨夜藏人奉りたりしかど、まうのはり給はずなりにし。あやしく、日比たび、、迎へ人をかへし給ふかな。もしおぼし怨することやある。あなたほし。」(『宇津保物語』vol.2.p.138)

3.3.2. [モシ-カ] の用法

次に、モシがカによる疑問文と共に用いられた用例をみてゆく。[モシ-カ] におけるカにはタリ・リという助動詞や体言が接続している点が〔モシ-ヤ-〕と異なる。こうした用例は次に示すように、目の前に起こった事態に対して話者が驚きを表したもののが非常に多い。

*18 仁田(1994)における「情報の呈示性」を参照。

*19 上代から中古にかけてヤの問い合わせ性が希薄になってゆく様子は阪倉(1993)大野(1993)によっても指摘されている。ただしそれらは形態的に推量的助動詞を伴う疑問文を指しての記述であり、ヤ自体の機能については明らかにされていない。

- (14) 「もし、死にたりける人を、捨てたりけるが、よみがへりたるか」と言ふ。
「何のさる人をか、この院の内に捨て侍らむ。」(『源氏物語』手稿 vol.5.p.342)
- (15) 「まめやかには日頃暑気にや侍らん、あやしく悩ましく思ひ給へられてなむ、
まうのはり侍らぬ」「それこそは、まうのはり給はば、さもおぼされざらめ。
まこと、何條悩ましさぞ。もし例のこと(※横虹)か」(『宇津保物語』vol.2.p.138)

驚きとは話者がある現実事態に遭遇した際、それまでの認識との隔たりの大きさなどから、その現実事態を受け入れることが容易でない時に発せられる。そのような時、話者にとってはそれが現実事態であっても仮想事態として受け止められるのではないか。モシが主観的な想定事態を提示することと、カ疑問文と共に用いられることの接点はそのようなところにあると考えられる。

このようにモシと共に用いられる疑問文は、ヤ疑問文の場合は疑念、カ疑問文の場合は驚きというように問い合わせ性格が希薄な文であり、こうした疑問文においてはこれまで述べてきたモシの機能と衝突することはないということが確認された。

3.4. モシが単独的に使用された場合

最後に、モシが単独で使用された用例をみておくこととする。以下に示すようにこうしたモシの単独用法には、モシと疑問の助詞が複合化したモシヤ、モシモヤという形式がみられることも興味深い。上代の文献におけるような「並列」の用法は存せず、いずれも話し手がある事態をとりたてて提示していることがわかる^{*20}。

k. [モシ]

- (16) 「もし^{*21}。いかなるぞ。さる(※身ごもった)人こそ、かやうには悩むなれ。」
(『源氏物語』宿木 vol.5.p.42)

*20 「並列」においては、話し手は命題の成立に関して中立的な立場にあると考えられる。[モシ-ヤ] [モシ-カ] の用例に選択疑問文がみられないことも、これらの用法において、話し手の立場が中立的ではないということを示している。

*21 この用例の解釈については、モシの後に「妊娠か」という疑問文が省略されているとする日本古典文学大系の解釈に従った。

1. [モシヤ]

(17) まして、もしやと思ふべきこともたえにたり。いにしへをおもへば、我ためにしもあらじ、心の本性にやありけん、あめ風にもさはらぬ物となはしたりし。(『蜻蛉日記』p.209)

m. [モシモヤ]

(18) 外は暗うなり、内は大殿油、ほのかに、物より透りて見ゆるを、「もしもや」と思して、やをら、御几帳のほころびより、見たまへば、(『源氏物語』澤標 vol.2.p.125)

ところでこうしたモシとヤが語法の上で調和することは先の 3.3.1 にて述べたとおりであるが、ヤ疑問文がモシと共に用いられた [モシ-ヤ-] には、次に示すようヤの結びが省略される例がある。

(19) おとどの、いとけ遠く、はるかにもてなし給へるはかく、みる人、たゞには、え思ふまじき御有様を、いたり深き御心にて、「もししかることもや」と思すなりけり」と思ふに、(『源氏物語』野分 vol.3.p.47)

(20) 「もしいで給ぬべくやとおもひて、まうできつれど、(来仏門に入った人を連れて) かへりては罪うべかめり。」(『蜻蛉日記』p.238)

このような [モシ- (モ) ヤ-] における係助詞の結びが省略される例は、以下の表が示すように、全体数の割合として少なくない。話し手の主観的態度を表す形式は中右(1980)が指摘するように、互いに矛盾しない表現形式が折り重なり累積的效果を發揮することがある。そうした性格の他にも、ヤの結びの省略化がモシヤ、モシモヤという複合形式の形成を促したものと考えられる。

表3. [モシ-ヤ-] 構文における結びの様相 (表中ブランクは用例数0を示す)

結びの形態/資料	竹	字	落	源	堤	土	蜻	枕	総数
推量系 (ム 12、ラム 3、ケム 2、ベシ 1)	9	2	4		1	2			18
結び省略		1		10			3	1	15
非推量系※1		5	1	6				2	14
用例数合計	0	15	3	20	0	1	5	3	47

(※1 非推量系の活用語はアリ 8、キ 2、ツ 1、トマル 1、給フ 1、捕ル 1 である。)

このように、モシは疑問文、仮定条件文、推量、推定表現の文と共に用いられることができる他、単独で使用することができる。このうち仮定条件文については、用例の殆どが客観的事実とは言い難い、話者の主觀性によって関係づけられた事柄が述べられており、また疑問文については問い合わせ性の希薄な疑念、驚きを表している。こうしたことから、モシには一貫して、主觀的な想定事態を提示するという機能が認められるということができる。

4. おわりに—モシを手がかりとして—

以上、中古和文系の文学作品を資料として、そこに現れるモシの用法上の整理を行った。これまでにも述べてきたように、モシには話し手の主觀性が強く認められ、仮定条件、疑念、驚き、原因推量、推定という表現を（累積的効果によって）強調することが可能であった。

さて、冒頭にもふれたように、こうしたモシの性格を明らかにすることによって、モシと共に起關係にある表現形式についても、より分析的な考察が可能になると思われる。

本稿の調査によって明らかなように〔モシ-ヤ-〕は問い合わせ性を希薄にし、不確かさを述べる文のタイプに属していることがわかる。中古の和文資料において、このような性格を有する疑問文が推量系の助動詞群、モコソ、モゾなど複合助詞による表現との間で、どのように位置づけられるべきか、さらに検討を加えてゆくべきであろう。

また、疑問文と共に起關係にある文副詞については現代語においても宮崎(1997)のモシカスルト(類)に関する言及がある。宮崎論文ではモシカスルト類と共に用いられる「疑い(宮崎 1997,p.15)」の形式は否定疑問文ノデハナイカに置き換えができると述べられている。しかし、中古の和文系資料における〔モシ-ヤ-〕あるいは〔モシ-カ〕にはこうした否定疑問の形態はみられなかった。今後、否定疑問文を含め、ヤ、カの語法を詳細に調査する必要がある。

こうした中古和文系資料における疑問文がどのような用法を有するのかということを理解する上でも本稿の考察はその足がかりを得ることができたと考える。

その他、モシヤ、モシモヤの展開およびモシカスルトの成立など、モシの史的跡付けを行うことは今後の課題としたい。

【参考文献】(脚注にあげた文献は除外する)

- 安達太郎(1999)『日本語擬問文における判断の諸相』くろしお出版
- 大野晋(1993)『係り結びの研究』岩波書店
- 尾上圭介(1987)『日本語の構文』『国文法講座6』明治書院
- 北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 工藤浩(2000)『副詞と文の陳述的なタイプ』『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 是澤範三(1999)「上代における「若」字使用の様相—疑問推量の場合—」「古事記年報」41
- 是澤範三(2000)「上代における疑問推量の表現—和語と漢語の意味領域と語法的相同一」「『語文』第75.76輯 大阪大学国語国文学会
- 此島正年(1973)『国語助詞の研究 助詞史素描』桜楓社
- 近藤泰弘(1987)「古文における疑問表現—「や」と「か」—」「国文法講座3」明治書院
- 近藤泰弘(1991)「中古語のモダリティの助動詞の体系」「日本女子大学紀要」40
- 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店
- 鈴木義和(1993)「ナラ条件文の意味」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- 高山善行(1992)「中古語モダリティの階層構造—助動詞の意味組織をめざして—」「『語文』58
- 高山善行(1993)「モダリティとモード—古代語における仮定条件文の帰結表現をめぐって—」「『日本語学』12-12
- 高山善行(1995)「複合助詞モゾ・モコソの叙法性」「『語文』65
- 中右実(1980)「文副詞の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座第2卷文法』大修館書店
- 中田祝夫・竹岡正夫(1960)『あゆひ抄新注』風間書房
- 仁田義雄(1991)「日本語の人物とモダリティ」ひつじ書房
- 仁田義雄(1994)「<疑い>を表す形式の問い合わせ的使用—「カナ」を中心とした観書—」「『現代日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科
- 仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」「日本語の文法3 モダリティ」岩波書店
- 沼田善子(1995)「現代日本語の「も」—とりたて詞とその周辺—」つくば言語文化フォーラム編「「も」の言語学」ひつじ書房
- 蓮沼昭子(1985)「「ナラ」と「スレバ」「」「日本語教育」56
- 益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- 益岡隆志(1997)「表現の主觀性」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版

- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』中文館書店(勉誠社 1978)
- 三宅知宏(1993)「派生的意味について—日本語質問文の一侧面—」『日本語教育』79
- 三宅知宏(2000)「疑念表明の表現について—カナ・カシラを中心に—」『鶴見大学紀要』37
- 宮崎和人(1997)「「モシカスルト」類について」『岡山大学言語学論叢』5
- 宮崎和人(2000)「判断形成のモダリティ」『国語学会平成12年度春季大会要旨集』
- 森山卓郎(2000)「基本範法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- Alice C.Harris(1984)"Interrogativity in Georgian." William S.Chisholm et al.(eds.)
Interrogativity : A colloquium on the grammar, typology and pragmatics of questions in seven diverse languages. Amsterdam : John Benjamins
- Mika Tsuchihashi(1983)"The speech act continuum : An investigation of Japanese sentence final particles." *Journal of Pragmatics* 7-4.

(2001年6月28日 受理)